

聞き手：東京大学文学部教授／各研究会代表理事／本誌編集長

# 島中君代 トップアスリート支援基金

**落合** 今回は本学に多大な寄付をお贈りいただき、ありがとうございます。これは、「明治大学島中君代 トップアスリート支援基金」として、オリンピックやパラリンピックを目標とする学生アスリートへの支援を目的として運用されることが決まりました。

**島中** 私はテニスプレーヤーとして、スポーツを通して生きてきましたので、色々な大会で明治大学が活躍してくれることが本当に嬉しいですね。ただ、昨年の冬季五輪で明治の関係者がほとんど出場していないのを見て、何とか2020年の東京オリンピック・パラリンピックには、多くの明治関係者に出場してほしいと感じました。今後5年間で、海外遠征など、五輪を目指す学生たちの強化につながる支援ができればいいなと思って急ぎました。頑張って、明治大学の名を上げてほしいというのが、私の素直な気持ちです。

**落合** こうしたバックアップは、学生たちにも大いに励みになると思います。硬式庭

球部の部長として私も島中さんと親しくさせていただいておりますが、改めて、学生時代のお話をお伺いしたいのですが。

**島中** インターハイで優勝したこともあり、色々な大学からお誘いもあったのですが、恩師である齊藤孝弘監督を頼って「どうしても明治に行きたい」と門を叩きました。当時は、女子の推薦制度がなかったものだから一生懸命勉強しまして。初めはソフトテニス部に所属して、2年連続で大学選手権に優勝しました。それから「日本の代表になって世界のテニスを見てみたい」という気持ちが強くなり、3年の時に硬式に転向。翌年、何とか硬式の全日本大学選手権でも優勝することができました。

**落合** 軟式と硬式、両種目のインカレ制覇はすごい快挙です。並大抵の努力ではなかったと思います。

**島中** 毎日、真っ黒になりながら、男子部員と一緒に練習していたので、技術・体力ともに鍛えられましたね。女子が相手であれば一本決まるボールが、男子相手では決まらない。そういう練習環境でしたので、自分のレベルアップに繋がったわけです。

学生時代、軟式と硬式の両種目のインカレを制した。

引退後は、世界と戦った経験から

「世界に通用する選手を育てたい」と後進の育成へ力を注ぐ。

「今の私があるのは明治大学のおかげ」その想いは寄付という形で

明大のトップアスリートを支援するために運用される。

5年後の東京五輪。教え子や後輩の活躍が今から待ち遠しい。

## 島中 君代さん

元プロテニスプレーヤー、  
株式会社ビックKテニススクール代表取締役

KIMIYO HATANAKA

1944年 東京都出身。  
1963年明治大学文学部入学。軟式庭球部に所属し、63年、64年の全日本大学軟式庭球選手権で個人、団体優勝。翌年、硬式へ転向。66年の全日本大学硬式テニス選手権シングルスで優勝。大学卒業後も、全日本テニス選手権でシングルス1回、ダブルス4回の優勝をはじめ、その他多くの大会で活躍。79年、アジア大会では、団体金メダルに貢献。世界四大トーナメント（全英、全仏、全米、全豪）への出場も果たす。引退後は、後進の育成に力を注ぎ、多数のテニスプレーヤーを輩出している。明治大学校友会 東京府西部支部北地区地域支部長。



恩師・齊藤孝弘

**落合** 卒業後の活躍も素晴らしいです。

**島中** 進路を決める時に、当時の体育課長だった村田為和さんに、「明治に残って、テニスを続けなさい」とお話をうたがまして、5年程、体育課でアルバイトをしながら続けました。全日本選手権優勝やウィンブルドンなどにも出場できまして、アジア大会でも金メダルを獲得することができました。本当にテニス一筋で、私自身、明治大学を卒業して本当によかったなと思っています。

り「世界に通用する選手を育てたい」という目標をもって、特にジョニアのレッスンに力を入れていました。日本全国から、私の指導を受けたいと来てくれたジョニア選手に対し、技術的な部分は自分自身の経験をもとに指導して、あとは選手自身で練習を積み重ねていくという方針で指導しています。特にメンタル面についても、厳しく鍛えるということを意識しています。「挨拶をしっかりする」、「親に対して感謝の気持ちを持つ」。結局、こういふことが一番大事で、ただいま選手ではなく、「いい選手になりなさい」と厳しく言うてきました。今では、私の教え子が色々な大学で活躍していて、去年のインカレ、全日本選手権で優勝した選手などもみんな私の教え子です。非常に嬉しいですね。

### 明治大学に感謝、だから応援したい

落合 島中さんのお話を伺っていると、明治大学に対する熱い思いを感じます。

島中 いまの自分があるのは、明治大学のおかげだと思っています。会社をつくって40年経ち、テニス一筋の人生ですが、明治で練

習して、卒業してからも、後輩たちが一生懸命練習に付き合ってくれた。振り返ってみても「感謝」の一言しかありません。ですから、明治のスポーツが強くなつてほしいという思いが強い。先日ラグビーの応援に行きましたが、どのスポーツでも、時間があれば応援に行きたいと思っています。

いま校友会の仕事もしていますけど、スポーツをやらない人でラグビーや野球、箱根駅伝の結果に一喜一憂しています。

やっぱりみんな明治に

勝つてほしい。私も、

うちのスクールの生徒

には、「みんな、明治

を応援しなさい」と

言うんです。そういう

意味では、明治の卒業

生は、みんな母校愛に

満ちていて「明治は

ひとつ」という言葉の

もと、まともにはずし

ないと思います。

落合 今後の目標や、夢をお聞かせください。

### 世界で活躍するアスリートを目指して

落合 テニスは元々は錦織圭選手、また、様々なスポーツにおいても海外で活躍する選手が増えています。この現状をどのように見られていますか。

島中 いま、子どもたちが小さいうちから海外に出ています。これは、ものすごくいいことです。フィギュアスケートをはじめウイ

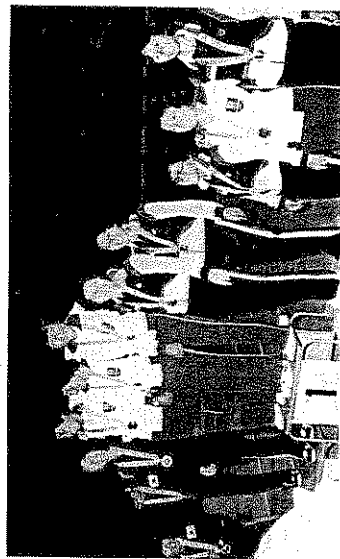


2年次の軟式インカレを制覇

ンタースポーツや卓球、バドミントンなど「世界で勝つ」、「五輪で金メダルを取る」と目標設定をしっかり持っているの、いい傾向ですね。錦織選手も、元々とても素質のある選手で、中学1年の時に海外に出ました。体はそんなに大きくありませんが、いいコートに恵まれて、色々と経験も積み、英語も堪能。近い将来、世界でナンバーワンになると私は思っています。しかしながら、私も育成に携わって40年以上になりますが、日本の指導者がもっともっと勉強して、海外経験だけに頼るのではなく、日本で強い選手を育てるということも考えていかなければならないと思っています。

落合 明治大学の体育会も、世界に通用するアスリートの育成を目標に掲げていますが、大学の正課外教育の一つでもある学生スポーツについてどのようにお考えですか。

島中 基本は文武両道ですから大学生は、勉強して単位も取らなければいけない。その時間を削ぎながら、目標に向かって練習をする。そうした中から時間の使い方や、自分のモチベーションの高め方などを学び、自分に打ち勝つていくこと。そうした



1978年のアジア大会（バンコク）で団体優勝

姿勢が学生スポーツには必要だと思います。

落合 私も体育会の学生を教えています。時間の使い方が非常にうまいです。試合でもちゃんと結果を残しているという印象があるので、社会に出れば、様々な分野で活躍できるのだからと期待しています。

島中 私がテニススクールを始めるにあたり



1971年、全日本選手権ダブルス・シングルズで優勝を果たした